

第 1 回 都立高校の魅力向上等に係る懇談会専門部会（第二部会）

議事要旨

日 時：令和 8 年 6 月 29 日（月曜日） 午後 5 時から午後 7 時まで

会 場：都庁第二本庁舎 16 階 教育委員会室

出席委員：5 名

1 開会

○ 東京都教育委員会教育長挨拶

教育長から次のとおり発言があった。

- ・ 全国では、公立高校の魅力向上や公立高校改革の名のもとに様々な取組が進んで様々な取組が進んでおり、今月中には改革を推進するための基金事業の採択結果などが発表される見込みである。
- ・ 都としても、昨年の 11 月から「都立高校の魅力向上等に係る懇談会」を開き、議論を重ねてきたが、都立高校のレポートリーや学生の多様性を踏まえると、単一の議論で収斂させることは困難であることから、新たに 3 つの専門部会を設置した。
- ・ その一つとして、困難を抱える生徒への教育や対応がテーマとしてある。一口に「困難」と言ってもその内容は多様であり、性質や背景、性格もそれぞれ異なる。こうしたことについて、専門的な視点から議論を深めていただきたい。
- ・ このテーマはいつの時代も存在してきたが、時代や状況の変化に伴って対応方法も変わってきた。さらに、多様性の実態が明らかになりつつある中、対応の難易度も上がっている部分がある。こうした中、委員の皆さまの専門的な知見を拝借しながら議論を深め、これからの高校の魅力向上へとつなげていきたいと考えている。
- ・ 「魅力」という表現には多少の違和感を覚えるかもしれないが、生徒の学びをどのように支えるかということは、高校の役割であり使命である。本部会は、その使命をより効果的に果たすための議論の場であると捉えている。
- ・ そういう中で、本日は密度の濃い貴重な意見交換、さらには御提案をいただきたい。

2 議事

○ チャレンジスクール

事務局からの説明に対して、委員から次のとおり発言があった。

- ・ 家庭環境に課題を抱えつつも、チャレンジスクールへの進学や、地域団体・ピアサポーターの支援を機に自立し、社会的に活躍している生徒の実例を見てきた。生徒の自立には学校と地域の双方が連携することが重要であるが、現状は属人的なサポ

ートに留まっている部分もある。

- ・ 不登校を経験した生徒が高校での学校生活を始める上では、登校し始めが最初の関門となると思う。毎日登校することが難しい場合の別の手だてなど、様々な困りごとへの対応が重要となる。可能であれば、最初のうちは授業時間を短めに区切ることなども有効かもしれない。
- ・ いわゆる「学業不振」を理由とする中途退学が減って、学校生活や学び自体への不適応が中途退学の理由になっているということは、現場実感と合っている。課題の本質が、いわゆる学力の補習というところから生徒と学校の関係性の再設計に移っているということかと思う。
- ・ フリースクールや子供たちの居場所を作るときには、スティグマを生まないことに最も気を遣っている。チャレンジスクールは不登校や中途退校を経験した生徒、エンカレッジスクールは力を発揮できずにいる生徒を受け入れる学校というように説明されるが、見え方として、子供たちにとって憧れて行きたいという場所になりづらくなってしまう懸念もある。子供たちがこの学校に行きたいと心から思えるような広報の仕方、ブランディングの仕方なども含めて考えていきたい。
- ・ チャレンジスクールだけではなく、エンカレッジスクールや定時制、通信制も共通して持っている課題の特定が重要だと考えている。こうした学校に通う生徒はアンケートを取っても、例えば全日制の生徒と比較すると自己肯定感や自己効力感が非常に低く、進路を決めるときになかなかアクションができない傾向があり、高い進路未決定率にもつながっている。
- ・ 定時制高校や通信制高校に通うことにより、道を外れてしまったようなレッテルを自分自身に持つ子もいる。自己肯定感を育むステップが教育の中にあることが重要。

○ エンカレッジスクール

事務局からの説明に対して、委員から次のとおり発言があった。

- ・ 基礎的・基本的な学力を身につけることは必要だが、それを目的としても、社会生活を送る準備というところまでは到達できない懸念もある。
- ・ 「力を発揮しきれずにいる生徒」の中には、例えば発達障害等により読み書きの学習が著しく難しい生徒もいる。そういった生徒に対し、基礎学力の定着を文字の読み書きの勉強の延長線上で行おうとすると、どんなに頑張っても報われないという結果となる懸念もある。勉強することの努力が報われるようなカリキュラムが必要。
- ・ 読み書きではなく、手に職をつけるような実務的な力を身につけることを期待している生徒もいると思う。小中学校のカリキュラムでは力を発揮し切れなかった生徒が、こういう高校であれば力を発揮できる、という学校になっているのかどうかの検証も必要。
- ・ 「学び直し」という言葉に一元化をするというよりも、その生徒に合った学びを提供し

ていくということが重要。今の高校の「単位を取る」という制度から少し外れて、東京都独自のモデルで高校段階の教育を1つ規定していく可能性もあるのであれば、決して学びを拒否しているわけではなく、学びたいのだけれども非常に学ぶのにエネルギーも時間もかかるような生徒にも、光が当たっていくと思う。

- ・卒業後に就職という進路を取る生徒も非常に多い中、なるべく高校1年生や2年生段階から、企業と組んだインターンなどが授業のプログラムに組み込まれていくと、就職に直結するとともに、最終的に離職も抑えていくことにつながっていくと思う。

○ 定時制・通信制

事務局からの説明に対して、委員から次のとおり発言があった。

- ・定時制高校と通信制高校で教育上一番不足しているのは、体験機会だと思う。通信制ではレポートと少数のスクーリングだけやって卒業していく場合も多く、しっかりと体験型学習を積んでいく機会を作っていくことが非常に重要。
- ・私立通信制高校が不登校の受皿として急拡大しているが、スクーリングの多いコースは学費が非常にかかる。都立通信制としては、スクーリングや学校の中でできる支援をしっかりと生徒に提供していただけるとよい。
- ・進路未決定の問題はあるが、実際のところ、どうしても進路が決まらない生徒はいる。そうした中でも、相談できる大人がいることや、いつでも行ける居場所がある状態で卒業してもらうことが重要。学校にいる間の方が、地域社会や大人とのつながりを持ちやすい。
- ・ひきこもりになってしまう若者がいるが、青少年期に仲間と出会う機会がなかったというところに大きな原因があると考えている。例えば私立通信制高校に通い、こうした機会を持てなかった若者は、なかなかひきこもりから回復できず、自立できない傾向があると感じている。自分の人生を自分で決めていくといった試練を若いうちに乗り越えていくことが必要。思春期からせめて25歳までの間に仲間を作り、仲間の中にいられるという環境をつくってほしい。また、多くの地域の力を集めて、そういう子供たちを一人にしておかないよう取り組んでいただけるとよい。
- ・夜間定時制は数もあり歴史的なものだと思うが、最近の子供たちの様子を見ると、昼間も含めた昼夜間の定時制だと積極的に自分のライフスタイルに合わせ、ここなら行けそうだと選ぶ方もいるように感じている。時代の流れに合わせて位置づけも変えていくことも考えられる。
- ・「定時制」という言葉には夜間定時制のイメージがある。制度上の問題もあるが、時代のニーズに合わせた呼び名などを考えることも選択肢。

○ 日本語指導が必要な生徒

事務局からの説明に対して、委員から次のとおり発言があった。

- ・ 日本語指導が必要な生徒の中には、日本で生まれて日常的に日本語も使用するが、家庭では別の言語を使用する生徒や、生まれは海外で、日本語の会話はできるが読み書きになると難しい生徒、この先の日本での在留予定がはっきりしていない生徒など、生徒ごとに多様な状況・背景がある。
- ・ 在京外国人生徒の枠で入学した生徒たちの中には、日常会話はできても読み書きが難しいなど、高校以前の段階から学習面で苦労している場合もある。そのため、学業についていけなくなったり、基礎学力が社会で求められる力に結びつかなかったりする課題がある。学校現場ではこうした点を踏まえて教育活動を行っていることと思うが、実際に生徒たちがどう受け止めているのか、ぜひ次回以降に教えていただきたい。

○ 全体について

事務局からの説明に対して、委員から次のとおり発言があった。

- ・ 多様な子供たちの選択肢を広げていくということで、いわゆる教育格差、体験格差を埋めていくことが公教育として求められている。
- ・ できればこういったチャレンジスクールやエンカレッジスクールなどを見学させていただくような機会があると、さらに議論がしやすくなる。
- ・ キャリア支援、生活支援、コミュニケーション支援という3つの枠組みが重要だと考える。働くこと、生活のこと、人との付き合い方を生徒が身に付ける教育課程が必要である。
- ・ いわゆるボトムアップの学び直しと併せて、社会人として必要となる学びを教育課程の中に入れていく必要がある。それをどのような枠組みで構築していくかが課題になるし、学校の特色を出すことになる。
- ・ 学びの中に、年代の近い青年との学び合いや、あるいは社会との接点をつくっていくことが学校に求められている。
- ・ スクール・ポリシーの活用が施行規則に位置づけられたこともあり、これを積極的に活用して学校の特色を出すことが今後ますます求められていく。
- ・ 社会的自立ということが言われるが、それは全てを自分でやらなければならないということではなく、できないことがあれば他者に相談する、助けを求めるということも含めての自立であると思う。そのためには自分とやり取りしてくれる人が必要であり、そういう意味では、高等学校教育段階では、教員がその担い手になることが重要である。

3 事務連絡

○ 事務局より

教育長から次のとおり発言があった。

- ・ 委員の皆さまが現場で直面していることや、研究対象やフィールドからお考えになられていることが、我々が学校現場で直面している部分と非常に重なり合っているのだろうと実感した。
- ・ これからどういう形でそれぞれの学校を変えていくのかという道筋は我々なりに考えて御提案もさせていただき、それに対してまた意見をいただく形になると考えている。
- ・ 委員からも御指摘があったとおり、人生は学校では終わらずその先があり、そこに働くこと、生活すること、そして人付き合いがある。この3つを在学中に身につけることが重要で、そのために我々は高校までの段階でそれぞれの校種をうまく使い分けながらどのように対応をしていくのかということが重要になる。
- ・ 「定時制」という言葉については、高度経済成長期を含めて確立されてきた1つのイメージがある。今はそういう時代ではなくなっている中、その枠組みを含めてどのように見直していくべきかということがある。
- ・ 通信制は、昔できた枠組が広域通信制の登場で変化した部分もあるが、今ある形のまま進んでいけばよいのかというのは一つの問題である。
- ・ 通信制の、自分の好きなときに何でもできるといった考え方も大切だが、人付き合いの欠落や、現実世界の軋轢を回避したまま社会に出る仕組みとなってしまう可能性も高く、実際にそうした実例が見聞きされているという御指摘もいただいた。こうしたところも含めて、新しい道筋を描いていく必要があると考えている。
- ・ 今日いただいた御指摘や御意見などを踏まえて、次回以降も様々な論点や問題点、今後の施策の方向性等について御提示・御提案させていただく。引き続きの御指導、さらには活発な御議論をお願いしたい。

○ 次回開催日程について

- ・ 第2回は8月以降に開催予定

4 閉会